

ハイ・バア・チュンの起義の伝承

——起義に参軍した諸將の伝承を中心に——

早川 雅美

目次

はじめに

一、ハイ・バア・チュンの伝承

(一) ハイ・バア・チュンの伝承に関する漢籍史料

(二) 現代の伝承

二、ハイ・バア・チュン指揮下の諸將の伝承

(一) 諸將に関する史料

(二) 地域分布

(三) 伝承内容の検討

三、ハイ・バア・チュンの伝承と諸將の伝承

おわりに

はじめに

東漢の郡県支配体制下にあった今日のヴェトナム北部地

域の人々が、徴側・徴貳姉妹を首領として起義の旗を揚げたのは、西暦四〇年の春のことであった。起義はその中心地交趾郡から瞬く間に近隣の九真・日南・合浦各郡に波及し、時の交趾太守蘇定は遂に出奔を余儀無くされた。ここにヴェトナム北部地域は東漢の支配から脱し、チュン・チャクが王を自称するに至って、独立政権を樹立したのであった。が、二年後漢帝光武は、名将馬援を伏波將軍に任じ、「反乱」の鎮圧へと乗り出し、四三年正月、二徴姉妹は斬首。再びこの地域は東漢の支配に屈しなければならなくなった。

文献史料に拠る限り、中国に対して最初の大規模な「反乱」を指導したこの姉妹は、ハイ・バア・チュン（二徴夫人）と呼ばれ、起義後二千年を経た今日でも、ヴェトナムの英雄として長く語り継がれている。二徴出現以降もヴェ

トナムは、ヴェトナム戦争に至るまで幾度となく外国の侵略に遭ってきた。こういった歴史的過程の中で、ヴェトナムの人々が二徴を古の英雄として伝承してきた、とするのは容易である。それでも尚、ここでなぜ小論を成すかと言

えば、この英雄伝承の在り方を筆者なりに確認したいからである。そのため本稿では、姉妹の指揮下で東漢軍と闘ったと伝えられる諸將の伝承を手掛りとして、何らかの答えを出したいと思う。

一、ハイ・バア・チュンの伝承

(一) ハイ・バア・チュンの伝承に関する漢籍史料
ヴェトナムにとっての初めての正史は、陳の太宗の命に従って、一二七二年、翰林院学士兼國士院監修黎文休が『大越史記』を編纂した、というが『大越史記』はそのま

まの形で現在伝わらず、黎文休より約二世紀後れた一四七九年、黎の聖宗の命により禮部右侍郎朝列大夫兼國子監司業兼史官吳士連が『大越史記』を踏まえて『大越史記全書』（以下、『全書』と略記）を編纂した。これが現在実見できる最も古い正史となっている。『全書』には、或る事項を記した後に、黎文休と吳士連の名で、その事項につい

て評文を載せており、一三世紀・一五世紀にそれぞれ生きた二人の歴史観を窺い知ることができる。

ハイ・バア・チュンについて見れば、『全書』外紀卷之三徴女王紀の記事の後にはこうである。（傍点は筆者）

黎文休曰く。徴側・徴貳は女子ながら一たび呼べば、九真・日南・合浦及び嶺外の六十五城皆之に應ず。其の國を立て王を稱するや、易く掌を反すが如し。見る可し、我が越の形勢霸王の業を致すに足るを。惜しいかな、趙の後を繼ぎ、以て吳氏の前に至る千餘年の間、男子徒らに低頭束手して北人の僕と爲り、曾ての二徴の女子に愧じず。吁、自らを棄つると謂ふ可し。

黎文休は、二徴は女子にして容易に我が越南の政権を作り上げたというのに、趙佗の後から吳権の独立に至るまでの間、男子はただ低頭束手して「北人」の臣僕となっていた。ああなんと無責任なことか、と嘆いているのである。固より『大越史記』は、元軍の侵略に遭って、北の大国（中国）に対する闘争意識が高揚した時期に編纂されたという背景を持っている。この点は、「北人」という語に如実に示されている。ヴェトナムの建国神話では、祖先を炎帝神農氏と結び付けており、古田元夫氏に拠れば、ヴェトナムが「北」中国と祖先を同じくする対等の独自の存在であると主張していることになるが、黎文休はここで、対

元抗戦のさ中にあるヴェトナムの男子の戦闘意欲を掻き立てようとしたのである。

この対元意識は、『後漢書』馬援・南蠻西南夷列傳にはば依拠しながらも、列傳では「賊」と呼ばれる姉妹を「王」と尊んでいることから理解できる。

黎文休の評文に続いて、呉士連の評文はこうなっている。史臣呉士連曰く。徴氏は漢守の虐を憤り、臂を奮って一たび呼ばば、我が越の國統を復び合するに幾し。其の英雄の氣槩は、あに獨り生時に於て、國を建て王を稱するのみならず、没後能く災を捍ぎ患を禦ぐ。凡そ灾傷水旱に遭ふとき、之れに禱れば應ぜざるは無し。徴の妹も亦然り。蓋し女ながら、士行有って、其の雄勇の氣、天地の間に在り、身を没してもなお消ゆること有らざる也。大丈夫あに其の剛直正大の氣を養はざるべけんや。

ここで呉士連が強調しているのは第一に、ハイ・バア・チュンがヴェトナムの一国としての伝統を再び齎らした、ということである。呉士連の生きた時代も黎文休と同じように、中国との対立関係を窺わせる。一四二八年、明軍を撃破して漸く独立を勝ち得たという時代背景の下で、呉士連は二徴の起義に深く共感するところがあったのだろう。第二に、呉士連は、ハイ・バア・チュンの「英雄の氣槩」は「没後」においても消えることなく、災いを防ぎ、災難

に遭った時には、姉妹に祈れば必ず応じてくれるのだ、と述べる。これについては『粵甸幽靈集』（以下『幽靈集』と略記）の「徵聖王」を検討しなければならない。

『幽靈集』は、奉御安邊路轉運使李濟川が編纂したものであり、一三二九年の彼の序に拠れば「我が越南には古くから傑出した英雄がいて、それら英雄は死後來世においても靈威を振っている。また山川の靈驗ある精靈も多い。これらを編纂し書と成す。」という。『幽靈集』には、「歴代人君」七、「歴代人臣」一一（以上、英雄）、「浩氣英靈」十（山川の精靈）の事跡が述べられ、その「歴代人君」の六番目に「徵聖王」即ちハイ・バア・チュンがいる。この記述内容は、起義の始末を述べた後、以下のように続く。（括弧内は筆者）

國人之れを哀み、祠を立てて之れを祀る。歴代尊んで福神と爲す、祠は喝江の上に在り、李の英宗の時、大旱に因って淨戒禪師に命じ雨を禱らしむ。涼氣人を襲ふ。帝（英宗）假寝に、二女、芙蓉の冠、緑の衣帯、雨に駕して來るを見る。帝怪しみて之れに問う。答へて曰く、帝は即ち徴氏姉妹也。玉帝の命を奉じて行雨して來たる。帝ますます風を作さんことを請う。手を挙げて之れを止む。帝覺む。命じて祠を修し祭を致さしむ。尋で命じて京師に迎回し、雨彌堂を建てて奉祀せしむ。後に又命じ

て祠を城外に立て、靈貞二夫人と敕封す。陳の重興四年、姉を封じて威烈夫人と爲し、妹を敬勝夫人と爲す。興隆二十一年、姉夫人に純貞の二字を、妹夫人に保順の二字を加ふ。

これに拠ると、ハイ・バア・チュンの死を哀れんだ「國人」が姉妹を祀る祠を立て、歴代に亘って「福神」として尊んできたことが分かる。この場合、「國人」とは起義の地域の人々を指し、「福神」とは幸福を齎す神のことである。

李の英宗（在位、一一三七～七五年）の旱天に際しての雨乞いの祈禱と帝の夢物語が前述呉士連の評文の拠る一資料である。即ち二姉妹は、「没後」に及んでもヴェトナムが何らかの災難に見舞われた時には靈驗を発揮する。その靈驗に因って、時の為政者英宗が親ら二姉妹の祭祀を命じ、勅封によって号名「靈貞夫人」を与えたのである。ここにおいてそれまで地域の福神だったハイ・バア・チュンが國家と関連付けられるようになったと思われる。その後このような祭祀は続く。それが、重興四（一二八八）年、興隆二十一（一三三三）年の号名勅封・加封に示されている。この勅封・加封は、何も二徴だけに限ったものではなく、『幽靈集』所収の全福神も受けている。然も、勅封・加封は重興元（一二八五）年、重興四年、興隆二十一年の年で

ある（表―1『粵甸幽靈集』―28神の年代別勅封名称―を参照）。これらの年代は、度重なる元軍の侵略、占城との緊張関係と無関係ではないだろう。靈驗ある福神たちは、祖国存亡の危機に際しても靈威を振うということが『幽靈集』から窺われ、延いてはハイ・バア・チュンも『幽靈集』編纂時点で、為政者側によって靈驗が認められた福神であることが分かる。

このように、ハイ・バア・チュンは、はじめ地域的に祭祀されていたが、号名の勅封・加封、正史においては「徵女王紀」という項目で記載されることによって、次第に國家と関連付けられていった。では現代においては如何に伝承されているのだろうか。

(二) 現代の伝承

筆者が入手できたハイ・バア・チュンの伝承に関するヴェトナム語文献は、『チュン女王伝説』（一九七六年刊）、『ヴェトナム女神伝』（一九八四年刊）である。

前者は、「民間文芸協会」及び「ヴィン・フー文化局」が蒐集したハイ・バア・チュンとこれに關係する諸將について書かれた文献、その廟の实地調査報告と民間伝承を基に、ヴィン・フー省内にある諸伝説を収録している。一九七三年のパリ協定成立を受けて、ヴィン・フー省の人々の

抗米闘争への意識鼓舞のために、歴史的英雄を紹介した、と本書の序は述べている。

後者は、ヴェトナムに古くから伝わる太陽・月等の自然神と歴史的な女性英雄を七五神蒐集した神話集である。その序文の末尾には「この神話集は、現代のヴェトナムの女性が輝やかしい過去の女性像に触れ、社会主義建設に当たって一層奮起できるよう願って上梓されたものである。」とある。

以上の点から、両書ともハイ・バア・チュンと諸将を題材にとって一体何を読者に訴えかけようとしているのかが凡そ推測されるだろう。一般読者を対象としたこの二文獻では、典拠に責任を持つ必要はなく、資料の切り貼り即ち都合のよい箇所を選択が容易となる。では、現代に必要なハイ・バア・チュン伝承とは、前節で取り上げた歴史史料の何が残りが新たに加わったものなのか。両書における二徴の記述は凡そ次のような筋立てをとっている。

(一)起義前史。(二)二徴の出自。(三)蘇定によるチュン・チャクの夫ティ・サクの殺害。(四)起義の準備。(五)起義①蘇定逃走、②独立、③馬援出陣、④カム・ケにおける敗死。(六)祠の建設。(七)李の英宗の夢物語。(八)現在の祭祀。(九)「二」は「チュン女王伝説」のみ記載)

(五)～(七)は前節の『全書』の評文その他の史料とほぼ同じ

同はハト・モンで旗揚げの儀式を行なった。そこでチュン・チャクは国のため・民のために誓詞を公にした。一、国恥を雪がんことを請う。二、雄氏の昔業を再び齎さんことを請う。三、そうでなければ夫は無実の罪を着せられよう四、この公令を全うせんことを請う。⁽¹⁶⁾この段は『天南語録』に典拠するようだが、筆者はこれを実現したことがない。ホアン・スアン・ハン氏によると『天南語録』は、嘉隆帝（在位、一八〇二～一九年）に編纂され、鴻臚から属明期まで、吟喃文字によって記された歴史叙事詩であるという。⁽¹⁸⁾筆者の見限り、他の漢籍史料には記載されていない記述がなぜ『天南語録』にのみあるのかは分からない。だが、この段がこうして伝わっている理由は「誓詞」の内容を吟味すれば推測は付く。起義の名目とは何か。それは「誓詞」の筆頭に表われている。「国恥」即ち漢の支配に屈することであり、独立政権を樹立することがこの起義の第一目的だ、というのである。そして独立への行為は言い換えれば、ヴェトナム建国の祖雄氏の成せる業を継ぐことでもある。然も、既に二徴は雄氏の末裔と説明されている。夫ティ・サク殺害に対する私讐はその後に述べられるのである。

かくして起義は起こされた。その展開は前節で見た歴史史料の内容を踏襲している。現代に伝わる伝承では、独立

内容である。ここでは(一)～(四)、(六)について検討する。

(一)では、約四千年前、現在の北部地域が雄王によって文郎国として初めて統一されたことを述べ、文郎国滅亡の後、続いて紀元前一一年に西漢の郡県支配に屈してより独立が喪われ、蘇定が交趾郡に赴任してくるとその支配は苛斂誅求を究めたと述べる。こうした状況の中からハイ・バア・チュン出現の必然性は生み出されるが、更にその必然性を強調するかのようになり、(二)の二徴の出自に、ヴェトナムの建国神話に纏わる話を付け加える。⁽¹⁴⁾「伝説に拠ると、世々王位を継承した雄家は第一八代雄璿に至って王位を譲る男子が絶えた。そこで蜀^{シツ}に王位を譲ったが、雄璿の死後、蜀が雄氏の再興を恐れて雄氏一族を滅ぼそうとしているという噂が流れた。そのため雄氏一族の多くは姓を改め各地へ避難した。徴氏と改姓した徴定、即ち雄定こそが、二徴姉妹の父である。」と。起義前史の大筋は『全書』鴻臚紀に拠っているが、そこでは二徴が雄氏一族であるという記述は無い。この出自説明記事が、現代の伝承では大きな役割を持つことになる。であるから、(三)で述べられるチュン・チャクの夫ティ・サクの死は、ここでは起義の直接的理由とはなっても、原因としては二次的な重みしかないのである。これは(四)の起義の準備に当たっての「ハト・モンにおける旗揚げの儀式」の段によく示されている。「一

国家としての伝統回復のために起義し、一時それを成し遂げたが、敢え無く敗死した歴史的英雄ハイ・バア・チュンは、生前においてだけでなく、死後も連綿としてヴェトナムのため靈験を発揮し、その精神は長く称えられて現在に至り、最後の(六)では「ヴィン・フー、ハ・ノイ両省には普く姉妹を祀る廟が在り、一年中香火が絶えない」という。

二、ハイ・バア・チュン指揮下の諸将の伝承

(一)諸将に関する史料

現在のヴェトナムにおける歴史学・地理学等に関する研究動向は『歴史研究誌』に拠って大方を知ることができる。同誌の創刊一九五四年（創刊時の名称は『文史地研究』）からハイ・バア・チュン起義関係の論文を抜粋してみると、一九七〇年代になって俄かにその数を増す。また論文内容も七〇年以前では、起義の概況を述べた後、「人民の連帯性の必要」「愛国闘争への意欲促進」を強調するだけのものに比べて、以降ではディン・ヴァン・ニャト氏のように、歴史地理学の分野から、当時の地名比定・戦場地域の考察などの諸研究、⁽²¹⁾そしてここで取り上げる諸将を祀る廟の調査等、⁽²²⁾研究の幅は広がりを持つようになってきた。

本章では、この『歴史研究』誌に発表された諸論文とヴェトナム語の民間伝説集を利用して、諸將の伝承を検討する。民間伝説集の利用に当たっては、各廟に祀られている人物の事跡を書き留めた「神跡」「神冊」「玉譜」を典拠としている箇所を取り、明らかに各文献の執筆者によって潤色されたと見られる箇所は省いた。

(一) 地域分布

伝承内容を検討する前に、諸將を祀る廟の地域分布について若干触れておく。前節で述べた諸文献を整理すると、表1-2「諸將の廟所在地及び人名」の通りとなる。⁽²⁴⁾ 総勢一八七名の將を祀る廟が、ヴィン・フー省の中心から紅河沿いに下ってヴェト・チ、ソン・タイを経て、ハ・ノイに至る百キロ余りの間に集中し、然もソン・タイから紅河下流に沿っては、右岸に広がりを見せているのが分かる（略図参照）。

この廟分布状況は、起義時の戦闘範囲とほぼ重なる。二姉妹の生地であり起義の拠点となったメ・リン、⁽²⁵⁾ 馬援との交戦で敗退を余儀無くされたラン・バク、⁽²⁶⁾ 二姉妹の最期の地となったカム・ケ、⁽²⁷⁾ この三地域で大規模な戦闘が繰り広げられた。現在地比定について、多少の異論はあるとしても、メ・リンは現イエン・ラン付近、ラン・バクは現ティエン

・ズー付近にその中心が在ったと比定される。但し、カム・ケについては①ソン・タイの東方、⁽³⁰⁾ ②バ・ヴィ山から流れるスオイ・ヴァン、⁽³¹⁾ ③フ・トー省の山岳盆地の三説があり、筆者はそのいずれとも確定できないが、本稿で扱う問題に関しては、カム・ケが前記のいずれに比定されようと三地域とも紅河右岸に位置しており、廟の集中地域範囲内にあるので、諸將の伝承を持つ地域も大概、起義を意識した広がりを持つと言えるであろう。

(二) 伝承内容の検討

利用した文献から略伝を得られたのは僅か四一将二七伝である。これらの略伝から諸將の伝承の基本的パターンを浮かび上げたい。まず、略伝の例として二伝を挙げる。

バト・ナン公主伝⁽³³⁾

今日のヴィン・フー省フー・ニン県フォン・ロウ社に、昔、ヴ・チャトとホアン・ティ・マウという夫婦がいた。ヴ家は富豪として名があり、また代々薬草に精通していて、常に薬草採りに三六州を廻り歩いていた。

マウ夫人は、辛丑の年八月一日に美しい女の子を生み、夫婦はその娘をテュック（淑）と名付け、大層慈しんで育てた。テュックは一六歳になると、美貌にして、学んでは諸子百家に通曉し、武は六韜三略を巧にした。人々は皆敬

服して「仙女世に下る」と崇拜した。

テュック、一八歳の時、その才色兼備の噂を聞いたナム・チャウ郡の郡將、時に二〇歳のファム・ザイン・ファンが、ヴ家にテュックとの婚姻を申し込んだ。ヴ公は彼の人柄を見て、テュックを嫁にやることにした。

しかし、漢の太守蘇定もテュックの噂を聞きつけて、ヴ公を首府に呼び寄せ、宴を設けて歓待しながらテュックとの婚姻を迫った。ヴ公は、テュックが既に結婚したことを告げ、その申し出を断わった。蘇定はこれを聞くと大いに憤り、ナム・チャウ郡に使者を送り、フォンを召喚して殺害し、宴中にヴ公も殺した。それから蘇定は、数百の兵をフォン・ロウ社に遣わし、テュックを奪うよう命じた。

凶報を受けたテュックは、激しく漢賊を恨み、すぐに家人に命じて母を連れて避難させ、自らは剣を取って漢賊の来襲を待った。漢賊が来ると、数十の賊を斬り、その包囲を破って天、⁽²⁸⁾ 徳江岸に走り、舟に乗ってティエン・ラ村の或る古廟に身を潜めた。

その夜、ティエン・ラ村の誰もが同じ夢を見た。城隍神が「村の古廟に一人の女神が休んでいる。すぐにその廟に行つて拝みなさい。そうすれば必ず恩恵を得るだろう。」と告げた夢だった。朝になって村の人々が廟を訪ねてみると、果たして三宝殿に一人の女性が両手に剣を握ったまま

眠っていた。村の人々に気付いたテュックは、彼らを蘇定一味と勘違いし、剣を振り翳した。慌てた村人たちは、即座に階段を降りてテュックに夢の話をした。テュックは自分の無礼を詫び、自分がなぜ彼らを殺そうとしたかを説明した。テュックの話聞いた人々は、残酷な蘇定一味に激怒し、皆がテュックの家来になることを請い、テュックを迎えて世話することにした。

数ヶ月すると、テュックは村の人々に、父と夫の仇を討つために廟に入り、周囲の豪族を集めて武芸の訓練をさせ兵糧も蓄え、来たるべき時に臨みたいと相談した。人々は皆喜んでそれに応じた。テュックはそこで、尼僧に成りすまして廟に入り、豪族を集め、兵糧を蓄えた。次第に彼らは勢力盛んな一党を形成するに至り、テュックはバト・ナン（撥難）大將軍と名乗った。

この時、太守蘇定の貪暴・残忍さに憤怒していたのはテュックだけではなく、四方で義士が挙兵していた。チュン姉妹が峯州で起義し、各地に義兵を募る檄を飛ばすと、大勢が檄に応じてチュン姉妹の許に集まってきた。

檄はティエン・ラ村にも至った。テュックは、チュン姉妹の才徳を測り兼ね、その檄に応じるか否か迷っていた或る夜、夢を見た。青旗を掲げた一女神が舞い降りてきて、その旗に記されている四句を指し示した。

女兵女将（女兵アリ女将アリ）

天以定名（天以テ名ヲ定ム）

勿可独立（独立ス可キ勿ケレバ）

事乃不成（事ハ乃チ成ラザラム）

テュックは目覚めると直ちに、兵を整えてチュン姉妹の許へ馳せ、姉妹に拝謁した。姉妹は、テュックが才智有つて勇敢であるのを見て取り、大麥に喜んで迎え入れ、前軍督領と為した。

テュックは漢賊との闘いで百戦百勝し、蘇定は遂に逃亡。チュン・チャクは王位に即いた。チュン女王は、テュックの労を犒つて、チュン・テュック（貞淑）公主と為し、ティエン・ラ村を食邑として与えた。ティエン・ラ村の人々は、テュックのお蔭で豊かに暮らせるようになったと感謝した。その天下太平の頃、テュックはチュン女王に許可を得て、故郷のフォン・ロウ村へ帰り、母や親しかった人々を訪ねた。ところが、その宴席に漢が馬援將軍を遣わして再び来侵した、という報が届いた。テュックはすぐさま、チュン女王の援助に向かい、姉妹と共に賊軍と戦った。

しかし、姉妹は力尽きて、カム・ケに退き、山に消え去った。テュックは、賊の罠を破つて数十人の部下と共にティエン・ラへ退いた。

テュックがティエン・ラへ退く前の戦いの時、テュック

レ・ゴク・チン伝⁽³⁴⁾

今日のヴィン・フー省ヴィン・トゥオン県ルン・ゴアイ社に、レ・ホアンとグエン・ティ・キムという夫婦がいた。レ・ホアンは漢方医で、仁徳があり、貧者を助け、私利私欲を求めなかったで、誰からも敬愛されていた。しかし、結婚して一四年経っても子宝に恵まれず、その事だけが悩みの種であった。

或る日、夫婦が菓草を摘みに蓮池の辺りに行くと、突然一陣の風が吹き、池の中から一艘の小さな龍船が浮かび上がった。龍船には二人の綺麗な女兒が乗っていた。ところがすぐに女兒は消え、次に一對の鳳が現われたが、これもまたすぐに消えてしまった。夫婦はその光景にことばを失い、ただ見入るばかりであった。その日から夫人は妊娠し、月満ちて二人の女兒を生んだ。姉はゴク・ティン（玉靑）、妹はゴク・チン（玉貞）と名付けられた。姉妹は夫婦が見た龍船の女兒とよく似ていた。もの静かで農作業や針仕事に熱心な姉、活発で樺叩きや石投げを好む妹、というように性格が正反對の姉妹であった。

姉のゴク・ティンは一九歳の時に東漢軍に捕えられ、その婢とされて悲憤のうちにこの世を去った。両親も悲しみと怒りのあまり病に罹って、間もなく死んだ。

ゴク・チンは伯父に養われながら、家の恨み、国の恨み

の美しさに目を奪われた或る漢将は、テュックを生け捕りにすれば褒美を与えると漢の兵に伝令していた。テュックがティエン・ラで暮すこと八ヶ月。三月一日の夜、月見をしていたテュックを漢賊が生け捕りにすべく襲った。テュックはすぐに剣を抜いて若干の賊を斬ったが、賊の数は増すばかりだった。テュックは包囲を突破して走り、大きな松の木の根元に至つて自刎して果てた。

テュックを祀る廟は、フォン・ロウ社、ドゥック・バ社（ヴィン・フー省）、ティエン・ラ社（タイ・ビン省）に在る。命日の三月一日には、テュックを記念する祭が開かれ、テュックが好んだ競渡、ハト・ドウム（男女の掛け合い唄）が行われ、また宴席には盆の代わりに葉を用いるという習慣がある。

フォン・ロウ社の廟には、テュックへの封名が次のように残されている。

後黎代、翰林院大学士阮丙、奉撰。後にフォン・ロウ社の人が抄写。

徵王封ジテ撥難大將軍貞淑公主ト為ス。

黎ノ聖宗封ジテ懿徳端莊貞淑公主ト為ス。

阮ノ明命封ジテ育胞中興靈符志神ト為ス。

阮ノ啓定封ジテ育胞中興靈符上等神ト為ス。

を忘れじと成長し、親戚や村人の援助を受けて、漢賊に抗するための小軍団を作り上げた。果たして東漢軍はルン・ゴアイ社に二度来侵したが、二度ともゴク・チンの軍に破れ、後退を余儀無くされた。

時に、交趾郡には壮士が剣を取って漢賊を追い払おうとする気運が立ち込めていた。メ・リン城には、雄王の子孫であるチュン姉妹が、各地に檄を飛ばして救国の士を募っていた。檄を得たゴク・チンは、軍を率いて姉妹の許へ馳せ参じ、自分たちの活動を報告した。チュン姉妹は喜んでゴク・チンを左將軍に任じた。ゴク・チンは、姉妹に付き従つてハト・モンにおいて天地に祈り、それから蘇定軍を討つために軍を進めた。ゴク・チンは勇敢に戦い、多くの功を立てた。蘇定を追い払った後、チュン・チャクは即位して、ゴク・チンを公主と為した。ゴク・チンは、両親が蓮池へ行った時、鳳を見て自分を生んだという話を憶い出し、ゴク・フォン（玉鳳）と号することを願ひ出て、女王に許された。また女王は公主を「裙釵豪傑、勇略絶倫」と称賛した。

しかし、時の漢帝光武は、新たに馬援を伏波將軍に任じ、女王に大軍を向けさせた。そして副帥劉隆にゴク・チン公主が守っているルン・ゴアイの砦を包囲させた。公主は勇敢に戦つて、多くの賊兵を殺したが、それでも賊は次から

次へと攻めてきた。公主は剣を振り続けたが、遂に手元を狂わせて剣を地に落としてしまった。そこで急いで、自分の胸当てを外すと、それに石を繰んで振り回した。賊兵はその威信ある姿に恐れおののき、敢えて公主に近づこうとする者はいなかった。

劉隆の軍が退くと、馬援は自ら軍を率いて公主の皆に攻め入ってきた。公主の軍は不意を襲われ、救軍もなく、包囲されてしまった。公主は血路を開きその包囲を突破すると、蓮池へと向かい、「我が父母は、この池で鳳を見て私を生みました。だから私はこの池に身を捧げます。」と言いつ終えるや否や、蓮池に飛び込んで殉節した。

レ・ゴク・チンは、二〇歳で義のために立ち、チュン女王に従って国を救い、各地で賊と戦い、二二歳で公主に封ぜられた。城壘を築き、長いこと賊に抗し、漢賊を震え上がらせた。そして、漢の名將馬援に抗すること五日間。レ・ゴク・チン大將軍は、チュン女王の「裙釵豪傑、勇略絶倫」ということばに正に相応しく、後の万世の英雄の鑑として挙げられる。レ・ゴク・チンを祀る廟は、ルン・ゴアイ社、ホア・ロアン社に在る。

レ・ゴク・チンが振り回した胸当ては、ホア・ロアン社へと飛び、胸当てに詰めた石はルン・ゴアイ社へと飛び散ったと伝えられ、祭日にはその故事に因んだ遊戯が行なわ

れる。ホア・ロアン社では、男女が藤の縄を引き合う綱引きが行なわれ、ルン・ゴアイ社では、フ・ダオ（男女がお金の埋まっている地点を目掛けて石を投げ、命中した方が勝ち）という遊戯が行なわれる。

この二伝を例として、諸將の伝承のパターンを検討していく。

一、家庭環境

バト・ナン公主は、ヴィン・フー省フー・ニン県フォン・ロウ社の生まれ。レ・ゴク・チンは、同省ヴィン・トゥオン県ルン・ゴアイ社の生まれ。二人の両親は共に有徳者であった。このように諸將の伝承は、故郷と家庭の説明から始まる。この二伝の他、父親が菓草に精通していて村人の役に立っているのは、レ・ア・ランとレ・アイン・トゥアン姉弟⁽⁴⁰⁾、ファト・ゲト⁽⁴¹⁾。また、トゥイ・ハイとダン・ザン兄弟⁽⁴²⁾の父親は教師、スアン・ヌオン⁽⁴³⁾の父親は地方役人であり、裕富で社会的にも認められた立場にいたことが説明されている伝もある。但し、ティエウ・ホア⁽⁴⁴⁾だけは柴刈りで生計を立てていた貧しい家庭の娘だった。しかしそのことが却って、ティエウ・ホア伝では、彼女がその貧しさに屈せず勤勉に働いたとクローズ・アップされ、彼女を祀る廟の村人によって親しまれ、誇りとされている。

このティエウ・ホアを除いては、殆どの人物が恵まれた家庭に生まれる。

二、誕生

レ・ゴク・チン誕生に纏わる奇怪な現象。これはレ・ゴク・チンにだけ特有な話ではない。諸將となる人物の誕生にはこの他にも、神異的な逸話が多い。

レ・ゴク・チンのように、両親若しくは母親だけが異常現象に遭遇した後に生まれるタイプのものと、母親が暗示的な夢を見た後に生まれるタイプのものがある。

前者の例。トゥイ・ハイとダン・ザン兄弟の母親は、一瞬にして起こった風雨の後に双児の兄弟を生んだ。ナン・クオック⁽⁴⁵⁾の母親は、水浴びの最中に蛟龍に巻き付かれたバクとビン兄弟⁽⁴⁶⁾の母親は、大きな虎の足跡に軀を嵌めた後に妊娠した。

後者の例。ナン・ティア⁽⁴⁷⁾の母親は、神に蓮華を授けられる夢を見た。ダオ氏三姉弟⁽⁴⁸⁾の母親は、三個の桃を食べ終ったところで目覚めた。ティエウ・ホアの母親は、傘圓神の子と称する娘に投胎を申し出られる夢を見た。ロイ兄弟の母親は、虎に押われる夢を見た。ゴク・クアン⁽³⁾の母親は、仙人に或る宮殿に連れてゆかれて、その宮殿の仙女を授胎させようと言われる夢を見た。

また、レ・ゴク・チンの両親がそうだったように、高齢

になっても子宝に恵まれない夫婦もいた。ダオ・キ⁽⁴⁹⁾、ダオ氏三將⁽⁴⁸⁾の二伝では、そのため高齢の夫婦が神に祈ったところ子を授けたとある。

超現実的な出生の顕著な例は、バア・チュア・パウ⁽⁴³⁾である。彼女は或る老女が植えた瓢箪から生まれ出た。

三、東漢支配に対する義憤

「仙女世に下る」と言われたバト・ナンにしろ、男勝りのレ・ゴク・チンにしろ、諸將となる人物は揃って幼い頃より英雄の気質を備えていたと言ってよい。英雄の気質は当然彼らに「国の恨み」ということばで義憤を抱かせるが、バト・ナンは、蘇定に父と夫を殺され、レ・ゴク・チンの姉は東漢軍の餌食となり憤死、両親はその報に落胆し、東漢軍に恨みを抱きながら病に斃れた、というように自らの身辺に東漢支配の弊害が及ぶに至りますますその怒りは強まる。フォン・ズン⁽⁴⁸⁾、スアン・ヌオンも東漢軍の手によって両親を喪った。彼らはその惨劇を契機として、バト・ナン、レ・ゴク・チンのように自ら対東漢軍の軍団を組織する。

また、「家の恨み」無くしても、故郷の村が東漢軍に蹂躪される様子を目の当たりに見て、チュン姉妹の起義より先に自ら軍を成していた者たちもいる。

例えば、ゲン・トゥアンとその弟たち⁽⁴³⁾の場合はこう

である。

「蘇定が交趾郡に赴任してから、交趾郡の人々は日増しに困窮していった。ゲン氏三兄弟は、トゥイ・ソン洞に來侵してくる賊を殺すことは容易にできたが、その報復に怒った賊軍が洞民を虐殺することを恐れ、押し黙って賊軍の言い成りになっていた。つけ上がった賊軍の兵は数を増し、各地を占領して人々を苦しめていた。その年の春、一頭の虎がトゥイ・ソン洞に來た。漢賊は洞民に虎を殺して蘇定に獻じることを命じた。ゲン氏三兄弟は、虎を囲んで争った。虎の雄叫びは響き互り、漢賊は恐れて逃げ匿れた。ゲン氏三兄弟が漸く虎を捕えた時になって賊は姿を現わし、捕えた虎の骨と皮は蘇定に捧げ、肉は賊一味で分け合い、洞民には何も与えなかった。三兄弟は怒って、一味を殺し、母と洞民を連れて山に籠もり、そこで東漢軍掃討計画を練った」。

この他、クアック・アは両親と死別した後、東漢軍に故郷の村を侵され、一人出奔し、或る廟に入って修行した。クアック・アの人と成りに感服したその地域の人々は、彼女に従って東漢軍に抗するべく、武芸の訓練に勤しんだ。ヴィン・ホアもまた、両親と死別した後、故郷を出てイエン・ラック県タム・ダイ府ティエン・ニャ庄に至り、この地で義を立てようと心決め、庄の人々を誘って軍を成し

た。

四、参軍

東漢軍追放の意志に満ちてはいたが、機会無く日々を過ごしていた者も含めて、その志を成就させる時が訪れた。二徴の起義と兵を招募する徴である。徴を受けた彼らは、軍を率いて二徴の拠点メ・リンへ向かい、姉妹に従軍を願った。この参軍の次第は諸伝に共通する。

参軍の際に彼らが募った兵とはどのような人々によって構成されていたのか。バト・ナンのように故郷を出て流浪の果てに辿り着いた土地の人々と行動した者もいるが、多くはレ・ゴク・チンのように、故郷の村で兵を集めて参軍した。

五、チュン女王の統治下

起義に参加した諸将は、蘇定率いる東漢軍との戦闘で大功を挙げた。チュン・チャクは土に為ると、諸将の労を搞って封爵し、故郷若しくは本拠地とした村落を食邑として与えた。そして殆どの将がメ・リンから一端離れて、その食邑地に止まった。

バト・ナンが食邑地ティエン・ラ村を豊かにしたと村人に感謝されたように、諸将のお蔭で益を得た食邑地の模様が具体的に示される伝もある。即ち、ティン・コンは、ザー・ラム県を巡察し、地域民の生活のため養蚕業を盛ん

にさせた。ナン・クオックは、故郷の村に田植えを教えた。クアック・ランは、トゥ・リエム県の人々に自分の俸禄を分配した。ティエウ・ホアは、ソン・クアン社に女王より下賜された金銀を捧げた。

このように諸将は食邑として与えられた村落に益を齎すように努め、一方では、更に水軍の強化訓練に励んでいたファト・ゲトの他、食邑地に砦を築くなどして東漢軍の再来に備えてもいた。

六、馬援の來侵

馬援の來侵に遭って、レ・ゴク・チンは食邑地のルン・ゴアイを攻められたが、多くの将はバト・ナンのように再び女王の許に馳せ戻り、二徴と共に拒戦する。ここでレ・ゴク・チン伝のように、その後の二徴について触れない伝もあるが、二徴にとっても、諸将にとっても、この馬援との戦いが最期の戦いとなる。

七、死

諸将は馬援との交戦で力尽き、前記二将のように自害するか、壮烈な陣死を遂げる。そして、その死に様も出生時と同じように神異的な形で語る伝が多い。

ダオ・キは首を刎ねられても、首の無い軀で戦い続けたので、漢兵は恐れて逃げ去った。故郷の村に帰る途中、出会った老婆に首が無ければ生きていられぬものだ、と言わ

れた途端に息絶えた。ダオ・キの屍には突如として盛り上がった土が覆い被さり、そして墓となった。ヴィン・フイは、ティン・コン、ナン・ティア各将は、一瞬の暗闇の間に死んでいたという。ダオ氏三将は川に身を投じたが、その直後に川から亀が群れを成して浮かび上がり、三将の屍を乗せて消えていった。ダオ氏三姉弟は、陣死の後三日間、死しても尚、敵を殺し続けたという。ファト・ゲトは東漢軍に追われて川に行き着くと、突如としてその川に扶け橋が浮かび上がり、ファト・ゲトが橋に乗るとその橋もろともに消えたという。

八、死後の祭祀

諸将の死後、故郷や諸将にゆかりのあった地域の人々は、その土地に諸将を祀る廟を建てた。バト・ナンを祀る廟は、故郷のフォン・ロウ社と瀾江対岸のドアック・バク社、食邑のティエン・ラ社に在り、レ・ゴク・チンを祀る廟も故郷のルン・ゴアイ社と、その近隣に在って胸当てが飛んだというホア・ロアン社にある。

また、バト・ナンの命日三月一八日には、彼女が生前に好んだ遊戯が行なわれ、レ・ゴク・チンの祭日には、彼女の武勇伝に因む遊戯が行なわれるように、諸将の祭日には、その地域なりの独特な風俗習慣がある。

ティエウ・ホアを祀るヒエン・クアン社では、ティエウ

・ホアの神台に彼女の貧しさを記憶しておくため、破れた布が置かれている。また、その祭日には、村人が二甲に分かれて叩き合うという競技が行なわれる。スアン・ヌオンが拠点としたフォン・ニャ社では、祭の時に、スアン・ヌオンが好んだというバイン・ザイ（菓子的一种）。砂糖黍・山薯を捧げ、一〇人の神官と兵士が裂いた水牛の肉を煮て、竹製の盆にバナナ・梧桐の葉を並べて供える。また競鶏・相撲・騎馬戦・男女の歌問答といった遊戯を行なう。スアン・ヌオンが洮江に身を投げたフォン・ノン社の廟では、僧が三日間祈り続け、その間、祭壇の前に六人の乙女が緑と赤の服を着て並び、両端の二人は被り物をして剣を持って水牛を裂く。そして、この地域の人々は「スアン」「ヒエン・ホア（母の名）」「サト（父の名）」を忌語として使わない。ファト・ゲトの誕生日一月三日と命日二月一〇日には、厳肅な祈りが捧げられる。クアック・アの誕生日二月一五日と命日一〇月一〇日には、水牛の丸焼きを供え、それを老若男女・通行人を問わず、その場で裂いて食べる風習がある。一月六日（ハト・モンでの儀式奉行日）には、クアック・アの武勇を記憶しておくために競渡・騎馬戦が行なわれる。こうした供祭時には、クアック・アの戎衣の色だった赤と黄の衣は着ないことになっている。ズオンとその弟バクとビン^{ビン}の祭日には、糯米を捧げ祭の後

て太宗が雨乞いの祈禱をしたところ夢に現われた。その直後、雨が降ったので太宗は固よりあった号名、玉光公主に二字を加えて玉光天郷公主と為した。

三、ハイ・バア・チュンの伝承と諸將の伝承

第一章でハイ・バア・チュンの伝承、第二章で諸將の伝承を見てきたが、本章ではこの二つの伝承を比較検討して纏めたい。

ハイ・バア・チュンの伝承の成立過程を整理すると次のようになる。二徴が陣死した後、起義の戦場地域の人々は二徴の死を哀れんで廟を建てて祀った。一三世紀に元軍が来侵してくると、為政者は対元闘争の意識高揚の中で、正史の編纂に取り組み、姉妹の事跡を称えた。また、号名の勅封・加封を行なった。こうして、ハイ・バア・チュンは、地域的な福神から国家と関連付けられたのであるが、このことは即ち、その地域的なハイ・バア・チュンに対する信仰が、国家も認める程であったことを意味する。また一方、二徴を祭祀していた地域住民にとっても、自分たちが祀っている人物が国家の後ろ盾を得て、その知名度が高まることは、却って名誉なこととなる。こうした地域と国家

にそれを奪い合う競技が行なわれる。また、バト・ナン^{バト・ナン}の他にも、次のように歴代為政者から勅封を受けた将もいる。

- ・ティエウ・ホア
- 丁先皇^{ディン・セン} 靈扶護国大王
- 黎大行^{レイ・ダイ} 靈威顯忠等女神
- 陳太宗^{チン・タイ} 靈応助愼大王
- 黎太祖^{レイ・タイ} 英靈保勝大王
- ・スアン・ヌオン

黎利が明を討つ時に夢に現われ、勝利を予言したため、第八位東宮公主という勅封を受けた。

・クアック・ア

丁部領^{ディン・ボウ}（後の丁先皇）がクアック・アゆかりの弦古寺に立ち寄った時に夢に現われ、丁部領は十二使君討伐の援助を請うた。国土を統一（九六七年）し終えた丁部領は、クアック・アを上等福神と為した。

黎大行 永花娘靈顯女國公主

姪娥婉媚貞淑夫人尊神（再封）

黎太祖 德行端莊貞節夫人

一位陰神靈扶清潔德行夫人（再封）

・ゴク・クアン

李太宗（在位、一〇二八～五四四年）の時代、大旱に遭っ

という重層的な祭祀によって、ハイ・バア・チュンの名は長く伝えられたのである。

諸將の伝承については、次のようなことが言える。第二章で見たように、諸將の伝承で多くの部分が占められるのは、諸將とその将にゆかりのある地域との関係である。即ち、先ずチュン姉妹の許へ参軍する時、故郷・本拠地とした村落の人々を自らの兵として率いたと述べる。そして、諸將はチュン・チャクが王を称すると、蘇定軍との戦いで挙げた功を認められ、王から封爵される。与えられた食邑地は、前述の土地である。伝は続けて諸將がその地域に有益となる諸活動をして、地域の人々に感謝されたことを述べ、馬援の来侵・劇的な諸將の最期があつて、最後に諸將の死後の祭祀の模様を説明して終わる。諸將は皆、ゆかりのある地域の人々によって廟に祀られる。誕生日・命日等の祭日には、その地域独自に諸將の生前の故事に倣った遊戯が行なわれたり、供物が捧げらるたする風俗習慣がある。これらの点から、諸將の伝承の主軸は、諸將と諸將を祀る廟の在る地域との関連付けにあり、各地域独特の伝承として成立してきたと推測できる。

ハイ・バア・チュンの伝承が、ヴェトナムが経験した歴史的過程の中で、祖国防衛闘争の課題を担って形成される一方で、これとは別に、起義の戦場地域の人々は独自に、

起義に纏わる伝承を形成してきた。それが、諸將の伝承である。諸將の伝承は、二・三の国家加封の例はあるけれども、ハイ・バア・チュンのように国家と深く結び付いて取り上げられることは無く、陰で地域的な民間伝承として根を張り、今日までのハイ・バア・チュンの起義の伝承を支えてきたのではないだろうか。

おわりに

以上、ハイ・バア・チュンの起義の伝承について、二徴姉妹指揮下の諸將の伝承を取り上げて考察を行ってきた。しかし、本稿は初歩的な管見に過ぎない。先ず、本稿の最

も大きな限界は、史料の問題にある。諸將の伝承を中心に論を展開しながら、基本史料となるべき「神跡」の類を、実見していないという点である。これらが実見できれば、諸將の詳細且つ正確な事跡や伝承発生の時代等を知る手掛りも掴めよう。また史料上の制限なくとも掘り下げねばならない多くの問題もある。例えば、伝承と史実の関係、『幽霊集』の諸福神と国家の関係等があり、また、この起義の指導者が女性だったことは、以前から母権制の問題と結び付けられるなどしてきた⁽³⁷⁾。本稿の表でも分かるように、一八七名の将のうち六九名を女性が占める。こうした問題については即断を避けたいので本稿では取り上げなかった。後考を俟ちたい。

註

- (1) 『水經注』卷三七葉榆水の條（楊守敬・熊會貞注『水經注疏』使用）
- 『後漢書』馬援列傳第一四・南蠻西南夷列傳第七六（章懷太子賢注・王先謙集解『後漢書集解』使用）
- 日本のハイ・バア・チュンの起義に関する研究のうち以下の論文を参照した。
- 奥崎裕司「漢代の反乱における『民衆法』」『史潮』新一四号 歴史学会 一九八三
- 片倉稜「中国支配下のベトナムⅠ」『歴史学研究』第八〇号 一九七三
- 「中国支配下のベトナム法試論」『金沢大学教養部論集』第二三一二号 一九八六
- 後藤均平「徴姉妹の反亂」『中國古代史研究』第三吉川弘文館 一九六九
- 桜井由躬雄「椎田問題の整理」『東南アジア研究』一七卷一号 京都大学アジア研究センター 一九七九
- (2) 『大越史記全書』大越史記外紀全書（陳荊和編校校合本『大越史記全書』上 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター 一九八四 使用）
- (3) 黎文休曰。徵側・徵貳以女子一呼而九眞・日南・合浦及嶺外六十五城皆應之。其立國稱王、易如反掌。可見

我越形勢足致霸王之業也。惜乎。繼趙之後以至吳氏之前千餘年間、男子徒自低頭束手為北人僕、曾不愧二徵之女子。吁可謂自棄矣。

- (4) 『大越史記全書』鴻臚紀
- (5) 古田元夫「ベトナム・インドシナの民族的諸相」『東洋文化』六四 一九八四 五五～五六頁
- (6) 史臣吳士連曰。徵氏憤漢守之虐奮一呼而我越國統幾乎復合。其英雄氣概獨於生時建國稱王。沒後能捍災禦患。凡遭災傷水旱禱之無不應。徵妹亦然。蓋女有士行而其雄勇之氣在天地間、不以身之沒後而餒也。大丈夫豈可不養其剛直正大之氣哉。
- (7) 『粵甸幽靈集』東洋文庫蔵の写本使用。
- (8) 國人哀之、立祠祀之。歷代尊為福神。祠在喝江上。李英宗時、因大旱命淨戒禪師禱雨。涼氣襲人。帝假寢、見二女冠芙蓉綠衣帶、駕雨而來。帝詰問之。答曰。妾即徵氏姊妹也。奉玉帝命行雨而來。帝請益作風。举手止之。帝覺。命修祠致祭。尋命迎回京師、建雨欄堂奉祀。後又命立祠于城外。敕封靈貞二夫人。陳重興四年封姊為威烈夫人。妹為敬勝夫人。陳興隆二十一年加姊夫人純貞二字、妹夫人保順二字。
- (9) 後藤均平『ベトナム救国抗争史』 新人物往来社 一九七五 より示唆を受けた。また、表11の形態も

これに倣った。

- (10) 一四世紀後半に書かれたウェトナムの史書『越史略』では、この時期の歴代守任の項目は「馬援」となっている。このように同じウェトナムの史書でも徴姉妹の時期を独立期と見成らない立場もある。
- (11) Nguyễn Khắc Xương (biên soạn) ; Truyền thuyết Trưng Vương, NXB. Phụ Nữ, 1976.
- (12) Đỗ Thị Hảo · Mai Thị Ngọc Chúc ; Các nữ thần Việt Nam, NXB. Phụ Nữ, 1984.
- (13) この記事は『全書』通鑑紀にあるが、通鑑紀は史実性に欠く。
- (14) 『ヴェトナム女神伝』には記されていないが、二徴の生涯について同じような説明をなしている文献は他にみられない。
- ・ Đặng Thanh Lê ; Văn học cổ với nữ anh hùng Trưng Trắc, Văn học 5, 1969.
- ・ Phan Huy Lê v.v. (biên soạn) ; Lịch sử Việt Nam NXB. Đại Học và Trung Học Chuyên Nghiệp 1985. p. 89
- ・ Trần Văn Giản ; Tư tưởng người việt cổ - qua chuyện thần thoại và truyền thuyết -, Đất Việt 3, THE GENERAL UNION VIETNAMESE IN CANADA, 1986.
- 1975.
- ・ Huyền Mê Linh về thời Hai Bà Trưng, NCLS 190, 1980.
- ・ Huyền Khúc Dương về thời Hai Bà Trưng, NCLS 209, 1983.
- (22) 諸書に関する論文は以下の通り。
- ・ Nguyễn Ngọc Chương ; Bước đầu giới thiệu một số nguồn tư liệu xung quanh di tích lịch sử thược về cuộc khởi nghĩa Hai Bà Trưng, NCLS 146 1972.
- ・ Vũ Tuấn Sán ; Cuộc khởi nghĩa Hai Bà Trưng tại thủ đô Hà Nội - qua một số di tích lịch sử - NCLS 149, 1973.
- ・ Nguyễn Khắc Xương ; Về cuộc khởi nghĩa Hai Bà Trưng - qua tư liệu Vĩnh Phú -, NCLS 151, 1973.
- ・ Văn Tân ; Công tác nghiên cứu Hai Bà Trưng và cuộc khởi nghĩa do Hai Bà lãnh đạo, NCLS 209, 1983.
- ・ Bùi Thiết ; Có một phong tuyến sông chảy trong cuộc khởi nghĩa - kháng chiến của Hai Bà Trưng, NCLS 209, 1983.
- (23) 前掲 (11) (21) に加えて
Lê Phương · Nguyễn Thị Chân ; Nữ tướng thời Trưng

- (15) Nguyễn Văn Mao ; Truyền thuyết về Hai Bà Trưng, 前掲 (11) 所収
- (16) Trưng Nữ Vương, 前掲 (12) 所収
- (17) 前掲 (14) Đặng Thanh Lê 論文の他、諸ウェトナム語文献で、この段の出典を『天南語録』としている。
- (18) Hoàng Xuân Hãn (sự dịch) ; Đại Nam Quốc Sử Diễn Ca, NXB. Sông Nhị, 1949. の序に拠る。
- (19) 前掲 (16)
- (20) 一九七〇年以前に発表された論文は以下の三論文。
- ・ Nguyễn Minh ; Ôn lại cuộc khởi nghĩa của Hai Bà Trưng, NCVSD 5, 1955.
- ・ Dương Minh ; Nhân ngày kỷ niệm Hai Bà Trưng, NCLS 36, 1962.
- ・ Duy Hinh ; Tinh chất cuộc khởi nghĩa Hai Bà Trưng NCLS 72, 1965.
- (21) Đinh Văn Nhật 氏の関係論文は以下の通り。
- ・ Đất Cầm Khê, căn cứ cuối cùng của Hai Bà Trưng trong cuộc khởi nghĩa Mê Linh năm 40-43, NCLS 148-149, 1973.
- ・ Vàng Lăng Bạc về thời Hai Bà Trưng I, II, NCLS 155-156, 1974.
- ・ Đất Cầm Khê về thời Hai Bà Trưng, NCLS 159,

- Vương, NXB. Phụ Nữ, 1976.
- (24) 表一の作成は、前掲 (23) Bùi Thiết 論文中の表より示唆を受けた。
- (25) 『後漢書』南蠻西南夷列傳 建武一六年の條 徵側者、潯陽縣將之女也。
- (26) 『後漢書』馬援列傳 建武一八年の條 軍至浪泊上。與賊戰破之。斬首數千級、降者萬餘人。
- (27) 『後漢書』同列傳 同年 援追徵側等至禁谿。數敗之。賊遂散走。明年正月、斬徵側徵貳。傳首洛陽。
- (28) (29) 前掲 (1) 後藤均平論文・前掲 (13) Lịch Sử Việt Nam, 他。
- (30) 前掲後藤均平論文
- (31) 前掲 Lịch Sử Việt Nam, 他。
- (32) 前掲 (1) 桜井由躬雄論文
- (33) Bất Nạn công chúa, 前掲 (12) 所収
Bất Nạn đại tướng, 前掲 (23) 所収
Bất Nạn công chúa, 前掲 (11) 所収
Nàng Ấ Chà (Ngọc Phương công chúa), 前掲 (12) 所収
- (34) Lê Ngọc Trinh đại tướng, 前掲 (23) 所収
Lê Ngọc Trinh, 前掲 (11) 所収

- (35) 以下の括弧内の数字は表1-2の数字に相当する。
 (36) Ba anh em họ Nguyễn và Họ Nguyễn, 前掲(11) 所収
 (37) 松本信広『印度支那の民族と文化』 岩波書店
 一九四二 一〇七頁

補註

ハイ・バア・チュンの起義については、日本のヴェトナム史研究書・概説書で取り上げられているが、しかし、ハイ・バア・チュンを取り巻く諸將の伝説について述べられているものは皆無と言ってよい。僅かにヴェトナムの中学の歴史教科書の邦訳『ベトナム I 世界の教科書II 歴史』で次の一節が紹介されているに過ぎない。

「山岳地と平野部のいたるところから人民と義將がこれに呼応した。大勢の女性が蜂起に加わった。安辺（ハイフォン）から黎眞（レ・チャン）は男女の義軍を率いて徴姉妹を援助した。安浦（ハバック省）からは聖天（タインティエン）が軍を率いて徴姉妹に従い先鋒の将となった縁河（タイビン省）からは八難（バットナン）が人民とともに蜂起したヴィンフーの娘詔花（チエウホア）も家は貧しかったが、義侠心に厚く徴姉妹に従って敵を攻撃し、大きな功績を取めた」。

（本稿は一九八七年度修士論文を基にしたものである。修士論文作成に当たっては、京都大学アジア研究センターの桜井由躬雄先生に資料をお借りし、また数々の御教示を頂いた。この場を借りて謝意を表させて頂きたい。）

表-1 『粵甸幽靈集』——28神の年代別敕封名称——

	1	2	3	4	5	6
1	嘉應善感靈武大王	士燮	士王 士王仙	嘉應大王	善感	靈武
2	布蓋孚祐彰信崇義大王	馮興	布蓋大王	孚祐大王	彰信	崇義
3	明道開基聖烈神武皇帝	趙光復		明道皇帝	開基	聖烈神武
4	英烈仁孝欽明聖武皇帝	李佛子		英烈皇帝	仁孝	欽明聖武
5	天祖地主社稷帝君	后稷		社稷司帝君	天祖社稷帝君	地主
6	徵聖王	徵側 徵貳	靈貞夫人		威烈夫人 敬勝夫人	純貞 保順
7	貞烈夫人	乍斗土妃	協正娘	協正祐善夫人	貞烈	貞猛
8	威明勇烈顯忠佐聖孚祐大王	光孝	威明勇烈	顯忠	佐聖	孚祐
9	校尉英烈威猛輔信大王	李翁仲		英烈王	威猛	輔信
10	太尉忠勇武威勝公	李常傑		忠輔公	勇武	威勝
11	保國鎮靈定邦城隍大王	蘇百	城隍神	保國	鎮靈	定邦
12	洪聖佐治王	范巨倆	洪聖	匡國	忠武	佐治
13	都統匡國王	黎奉暎		都統王	匡國	佐聖
14	太尉忠惠公	穆慎		忠惠公	武亮（後に加わる）	
15	却敵威敵二王	張 張喝		却敵大王 威敵大王	善佑 勇敢	助順 顯勝
16	証安佑國王	李服蜜	証安國	証安王	明應	佑國
17	回天忠烈王	李都尉	回天神王	忠烈	威武	助順
18	果毅剛正王	高魯		果毅正	剛正	威惠
19	應天化育元君	元君	后土夫人	后土地祇夫人	元忠	應天化育
20	廣利大王	龍度王氣之君	廣利大王	聖佑	威濟	孚感大王

表-2 讀者半分の場所所在地及び人名
 n…女性を示す ○…本文で引用した特

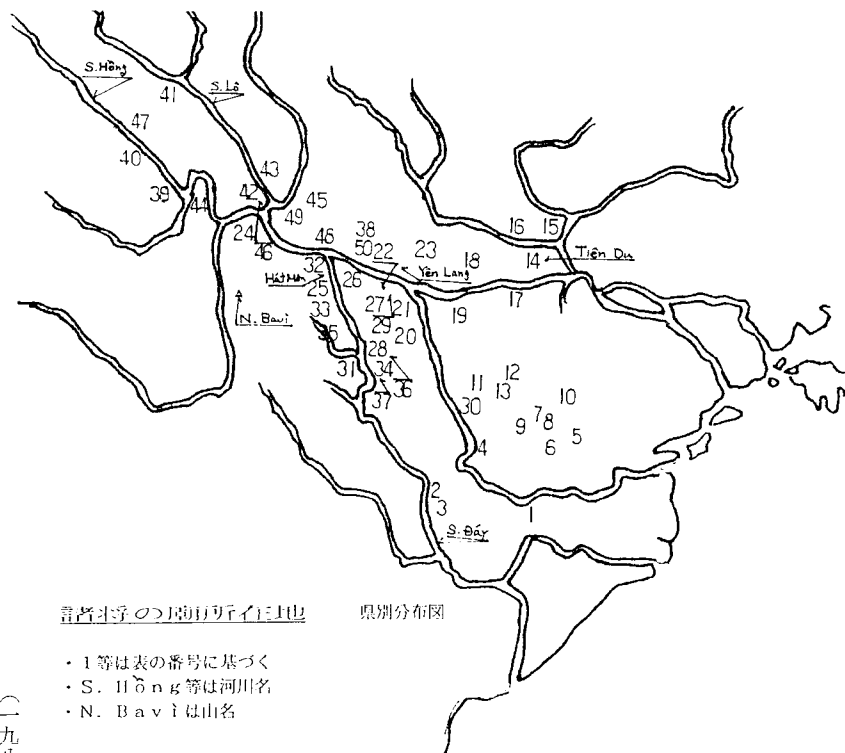
＼	TỈNH (省)	HUYỆN (県)	XÃ (社) v. v.	TÊN NGƯỜI (人名)
1	Hà Nam Ninh	Nam Định	Lộc Vương (Tức Mạc 馮) (Vinh Tường 亭)	n. Phạm Thị Hồng (范氏紅)
2		Thanh Liêm	Thành Hà Liêm Chung Thanh Nghi	Phan Cung (潘君) Phan Lương (潘兩) n. Cao Thị Liên (高氏蓮) Cao Bà Văn To (高文祖) Lê Hồng Nghi (黎恒毅) n. Bảo Nương (婦) n. Lưu Nương (婦) Quách Thị (郭氏) n. Hoàng Mai công chúa (黃梅公主) n. Ngọc Dung công chúa (玉容公主)
		Thanh Phong		Khoan Nhân đại vương (寬仁大王) n. Vạn Phúc phu nhân (萬福夫人) n. Ngọc Ngâm (玉顔) n. Linh Bảo Nương (靈保) Ông Đức (德) n. Nguyễn Thị Lan (阮氏蘭) n. Quỳnh Anh phu nhân (瓊英夫人) ① Ngọc Quang (玉光)
3		Hoa Lư	thị trấn Hoa Lư	
4	Thái Bình	Duyên Hà	Tân La	① Bất Nạn (撥難)
5		Phủ Đức	Mình Sơn	Ngọc Hằng (玉行)
6		Tiên Hưng	An Khê	Thổ Dương (都陽)
			Thắng Long	n. Cẩm Hoa (錦花)
7	Hải Hưng	Bình Giang	Mĩ Thử	n. Nguyệt Thai (月台) n. Nguyệt Hồ (月渡)
8		Ninh Giang	Thường Long Ninh Thành Hồng Túc	Tống Phổ Công (宋普功) Hồ Đại Liêu (胡大娘) Lý Công An (李公安) Tỷ Giông (徐?)
9		Thanh Miên	Ứng Hòa	n. Trần Ngọc Tích (陳玉迹)
10		Tứ Kỳ	Ngọc Kỳ	Long Lang (龍郎)
11		Vãng Giang	Tân Tiến Thắng Lợi	Ông Đức (育) Hùng Tướng Công (雄將功) n. Hoa Tiên (花仙) n. Phương Dung (芳蓉) n. Mai Hoa (梅花)
12		Văn Lâm	Đại Đồng	Tam Giang (三江)
13		Yên Mỹ	Dân Chủ	Lữ Văn Al (李文乙)
14	Hải Phòng	Hải Phòng (Thành Trĩ)	Khu phố Lê chân	n. Lê Chân (黎貞)
15	Hà Bắc	Lạng Giang	Ngọc Lâm	n. Thánh Tiên (聖天)
16		Tiến Sơn	Tướng Giang Đồng Giang Cầm Giang	Tam Quang (參光) Tam Ngọc (參玉) Vi Pháp Hải (韋法海)

21	明主昭感大王	銅鼓山神	天下主盟 福神	靈應大王	昭感	保佑
22	開元威顯大王	天神		開元威靈 大王	隆著	忠武
23	冲天威信大王	土神	冲天神主	勇烈大王	昭應	威信
24	佑聖顯應王	山精		佑聖王	匡國	顯應
25	開天鎮國大王	(藤州の 土神)	1005年 1009年	開天城隍大王 忠輔		鎮國
26	忠翊威顯大王	土令長		忠翊王	武輔	威顯
27	善護國王	土神		善公國公	靈應	彰武
28	利濟通靈王	火龍之精		利濟王	靈通	惠信

	Hà Sơn Bình	Chương Mỹ	Hoàng Diệu	Trình Nghiêm (呈嚴)
				n.Trình Liêu (柳)
				Trình Diên (堯)
				Trình Tiến (進)
				n.Trình Xuân (春)
26		Đan Phượng	Nại Xá	Đặng Thi Sách (鄧詩索)
				Vĩnh Gia (永嘉)
			Thấp Thượng	Lôi Chân (雷震)
			Hà Trì	Sá Lăng (訖朗)
			Ngõa Thượng	Hải Diên (海堯)
			Liên Minh	Hải Diệu (海妙)
			Hồng Phong	Nam Uyên (南淵)
				Đông Hải (東海)
27		Đoang Hùng	Phượng Trung	Nhật Trục (日足)
				Trăng Ut (長示)
				Cao Sơn (高山)
				Hùng Dũng (雄勇)
				Hùng Việt (雄越)
				Trần Tuấn (陳俊)
				Vương Đạo (王道)
28		Hà Đông (Thị Xá)	Văn Phú	Đông Xá (東社)
29		Hoài Đức	Yên Nghĩa (Lô)	n. A Lã Năng Đạo (Lang Lã)
			Quách Xá	Nguyễn An (阮安)
30		Kim Hân	Liên Tiệt	Nguyễn Phúc (阮福)
				n. Nguyễn Dung (阮容)
			Lê Hồ	Nguyễn Phúc Tinh (阮福精)
			Đông Hoa	n. Nguyễn Nga (阮娥)
			Châu Sơn	n. Thánh Thiện (聖善)
31		Mỹ Đức	Bột Xuyên	Cao Minh (高明)
				Cao Tuấn (高俊)
				Cao Pháp (高法)
				n. Nguyễn Nga (阮娥)
				"
32		Phúc Thọ	Giáp Ba	n. Trinh Thụy (貞瑞)
			Tụy Lai	n. Trinh Thục (貞淑)
			Vân Giang	n. Phùng Thị Tả (馮氏左)
			Bại Nghĩa	n. Phùng Thị Huyền (玄)
			Vĩnh Thọ	n. Phùng Thị Cát (吉)
				n. Bạch Hoa công chúa (白公主)
33		Quốc Oai	Vân Nam	Chàng Năm ()
			Nghĩa Hương	Nàng Năm ()
				Thủy Hải (水海)
			Khánh Hiệp	Đỗ Tề (杜祭)
				n. Tạ Căn Nương (謝芹)
				n. Lý Thanh (李青)
			Hạ Hiệp	n. Đặng Xuân (鄧春)
			Đường Lâm	Hoàng Đạo (黃道)
				ba anh em họ Đặng (鄧三兄弟)
				Chiêu Trung (昭忠)
				Đỗ Hy (杜希)
				n. hai chị em họ Lê (黎氏姊妹)
			Sài Sơn	Lý Mệnh (李命)
			Đông Yên	n. Mai Thị Trang (梅氏裝)

17	Hà Bắc	Thuận Thành	Văn Lan	Đ. Bì (碧) A Tác (作)	
18	Hà Nội	Đồng Anh	Mai Lâm (Lộc Hà 村) (Lê Xát 村) (Thị Thôn 村) Đội Hối (Hối Phú 村) (Đồng Tru 村) Gia Lộc Liêm Hà (Đại Vĩ 村)	○Đào Kỳ (桃麒) ○Phượng Dung (芳蓉) " Đồng Bằng (東榜) ○Thủy Hải (水海) ○Bàng Giang (登江) Không Chung (孔衆)	夫 婦 兄 弟
19		Gia Lâm	Vân Hà (Cổ Chân 村) Xuân Đình Đài Tôn Gia Thụy (Sài Đồng 村) Lông Biên (Tứ Đình 村) (Nhà Thôn 村) (Trạm Thôn 村) Việt Hưng (Ổ Cách 村) Kiêu Kỳ Cự Khối Kim Hà	n. Vĩnh Huy (永輝) Cửa Ngõ (門里) ○Ba tướng họ Đào Đào Độ Đào Hiền } (桃氏三將) Đào Lang ○Thành Công (成功) " " " ○Nàng Quốc (國) Khố Ba Sơn (裸參山) Ông Đông (東那) Ông Nà (那那)	
20		Thanh Trì	Hoàng Văn Thu (Mai Động 村) Vĩnh Quỳnh Hầu Nghiêm (Thổ Quan 村)	Nguyễn Tam Trinh (阮參貞) " ○Nàng Tia (紫) ○Ba Vị tướng chỉ em ruột họ Đào (桃氏三將弟) n. Phượng Dung (芳蓉) Hiền Hiền (賢賢) } Quí Minh (貴明) ○Quách Lăng (郭朗) Đông Xá (東舍) Xa Lai (車來)	
21		Thọ Xương			
22		Từ Liêm	Thượng Cát		
23		Kim Anh	Đông Minh Cao Minh		
24	Hà Sơn Bình	Ba Vì	Phú Nghĩa Nam Nguyên Trần Phú	n. Phùng Thị Chính (馮氏政) n. Nam Thiên (南善) Chu Thuộc (周屬) n. Văn Mộng (文夢) n. bà Vĩnh Hoa (永花) n. mẹ con bà Lý Thị Ngọc (李氏玉母子) Đặng Cả Đặng Hai } (鄭) Đặng Ba	
25		Chương Mỹ	Hồ Sơn (Đồng Lạc) Kim Côi Đông Sơn		

49	Vĩnh Phú	Yên Lạc	Nguyệt Đức (Tiên Nha 村)	①Vĩnh Hoa (永花)
50		Vĩnh Tường	Hòa Loan Lũng Ngòi Thượng Lập	①Lê Ngọc Trinh (黎玉貞)
		Yên Lãng	Trắng Việt Thái Lai	Cả Lợi) (利兄弟) Hải Lợi) n. Hồ Đắc Nương (胡鶴) Hùng Bảo (胡保) Trần Nạn (陳安)
計	8	50	124	187



34	Bà Sơn Bình	Quốc Oai	Cần Hữu	n. Nhất Trung Á (范忠亜) n. Nhi Trung Á (阮忠亜) Trần Quý Thành (陳貴成) Cải Công (蔡功) Lai Quan (来關) n. Ngọc Trân công chúa (玉珍公主) n. Thiên Thần (天紳) n. Thiên Trùng (天川) Trúc Sơn (竹山) Địa Trùng (地長) Ba Giang (三江) Đạo Khang (道康) Giám Sát (監察) Hùng Nguyên (胡元) hai anh em Phạm Thông (范通兄弟) ba anh em Quốc Khang (國康三兄弟) n. mẹ con bà Hồng Nương (紅母娘) Cung Bàng (弓榜)
35		Thanh Oai	Thượng Thanh Thanh Cao Hồng Dương Tam Hưng	
36		Thạch Thất	Phù Đa Trúc Động Tô Hiệu Đình Xuyên	
37		Thường Tín Ứng Hòa	Lai Tảo Đông Lỗ	
38	Vĩnh Phú	Bình Xuyên	Quất Lưu Tạm Hợp	n. Đàm Nương (譚) n. Hồng Nương (紅) n. Thanh Nương (青) n. Dương (養) ○Bạch (白) ○Bính (秉) Châu Di (周政) Nguyễn Cư (阮居) Tiến Anh (進英) ①Lê A Lan (黎安) ○Lê Anh Tuấn (黎俊) n. Đàm Ngọc Nga (譚玉娥) ①Bát Nạn (撥難) ①Bà Chúa Bầu (瓢箪公主) ○Nguyễn Tuấn (阮俊) n. Thục Nương (淑)
39		Cầm Khê	Điền Lương	
40		Hạ Hòa	Văn Lang	
41		Đoan Hùng	Tây Cốc	
42		Phù Ninh	Phượng Lâu	
43		Lập Thạch	Đức Bắc Đạo Trù Hợp Lý (Tùy Sơn 村) Quang Yên (Yên Thiết 村) Thái Hòa (Sen Hồ 村) Liên Sơn Quang Húc	
44		Tam Nông	Hiền Quan Hương Nha Vực Trường Thanh Uyển Nạm Cường Cổ Tiết Hương Nộn	n. Quý Lan (貴蘭) n. Nàng Quỳnh (瓊) n. Nàng Quế (桂) ①Thiếu Hoa (詔花) n. Xuân Nương (春) "
45		Tam Dương	Hội Thịnh	n. Lê Thị Liễu (黎氏柳)
46		Việt Trì	Mình Nông	n. Nàng Nội (內)
47		Thanh Ba	Phượng Lĩnh	①Phật Nguyệt (佛月)
48		Yên Lạc	Nhất Chiêu	①Quách A (郭阿)